

敵の聖騎士様に捕らえられ、  
十年分の重すぎる執着愛をぶつけられて逃げられない

「お姉さま！ 今日カチコむ地区の聖騎士サマって——すごく強い、んですよねえ」

馬車の中で、作戦用の地図を広げながら、妹分の魔術師、ピンク髪のミアが不安そうに言う。

「もう！ ミアったらそんな事も知らないの？ 今日の手相は白の聖騎士ルシアン。電撃魔法の使い手で、ロイヤルガードの団長よ。顔はいいけど、敵には容赦しないって有名」

「ええーッそんなあ……わ、私、魔力少ないし初陣なのに……大丈夫かなあ……」  
不安がるミアに、私はわらいかけた。

「大丈夫よ。ウチのギルド——夜鴉同盟は、闇ギルドではあるけど、その分結束は固いの。大事な仲間を見捨てたりなんてしないわ」

ミアが、子犬みたいなまなざしで見上げてくる。

「うわあぁんお姉さまぁッ！ あたしお姉さまに一生ついていきますうう！」  
ふふ。かわいい妹分だわ。

けど、ノエルは不安そう。

「ノエル、大丈夫？」

「……白の聖騎士ルシアンが相手となると、正直不安です」

そうよね。それじゃあ——とっておきの秘密を、話してあげるとしましょうか。

「実は私——彼と戦って、勝ったことがあるのよ。だから今回も大丈夫」

すると二人は目を丸くした。

「えっ!? あの、最強のルシアンと？」

「い、いつ、どうやって……？」

好奇心に満ち満ちた目で見上げられて、ちょっと苦笑する。

——あんまり話したくない過去だけど、二人を安心させるためなら、しょうがないわね。

「実は私、ギルドに入る前には魔術学校に通ってて。ルシアンはクラスメイトだったの。その時、ちょっと揉めてね」

「ええ!!」

二人が驚いて、目を丸くする。

「だから、今日も大丈夫。彼の魔法のことはよく知ってるし、電撃魔法って正直スキも多いのよ」  
すると二人はやっと、安心した顔になった。

「やっぱりお姉さまはすごおい……」

「あのルシアンに勝ってたなんて……」

私は窓の外を確認した。そろそろ目的地につく。

「ええ。けど、彼が強いのも、闇ギルドにとって厄介な相手なのも確か。気を引き締めていきましよう」

「ええと、でも、殺す……わけじゃなくて、聖紋を書き換えて、聖騎士の資格を奪うだけ、なんですよね!？」

ミアは張り切って腕まくりをした。

「そうよ。聖紋がダメになれば、聖なる魔術が使えなくなつて、この地区の聖騎士団は壊滅する。そうすれば全ギルドが動きやすくなる」

私は二人に目配せした。

「この地域は、一番貴族の専横がひどい土地。私たちの力で解放できれば、自由に商売できるよになるし、領民も豊かになるわ」

ミアもノエルも、真剣な表情でうなずいた。

闇ギルドは——横暴な貴族に抗う組織だ。

3人で腕を出す。そこには、黒鴉同盟のメンバーの資格——銀のバングルが光っていた。

「はい。自由のために！」

「夜鴉のごとく羽ばたく！」

私はうなずいた。

「ええ！ 無事倒したら、いつもの居酒屋でお疲れ会、しましょうね！」

「やったあ！ 私あそこのしゅわしゅわリキュール大好き！」

私も、あの店のリキュールは大好き。

終わったなら、いつものように二人で乾杯しよう——



と、思っていたのに。

数時間後、私は拘束されたノエルとミアの前で、なすすべなく倒れていた。情報が洩れていたらしく、屋敷に踏み込んだ瞬間、兵士に包囲されたのだ。

そして——ルシアンは、昔とは比べものにならないほど強くなっていた。

「はは、ざまあないな。汚らしいメス鴉め」

武器のリボルバーを奪われ、電撃をくらってうごけない私の顔を、ルシアンは楽し気にのぞき込んだ。

「10年ぶりだな……？　ずっとこの時を待ってたよ」

輝く金髪に、空のような青い瞳。端正な甘い顔立ちとは昔と変わらないのに、その表情には、昔にはない凄みがあった。

「ノエルとミアを……放せッ……！」

電撃の痺れにあえぎながらもにらみつけると、ルシアンの笑みがすっと引いた。

ルシアンは微笑みながら、射るような目で私を見た。

「はあ？　命令できる立場だと思ってるの？　お前は負けたんだよ？」

「くっ……」

ルシアンは冷酷に笑って、剣を抜いた。

「さて――この不屈き者めらを、どうしてくれようか」

ルシアンはサーベルの先で、ノエルの顎をくいと上げた。ノエルはルシアンを睨み返した。

「反抗的だな。よし、先にこの赤毛を刺し殺そう。次はピンクのお前だ」

いけない！　このままでは……ッ！

私は床に這いつくばったまま、必死で顔を上げた。

「やめて！　頼むから……ッ！」

すると、待ってましたと言わんばかりにルシアンは私を振り向いた。

「へえ？　なんて？」

「彼女らのボスは私だ！　私だけを捕まえなさい……！」

ルシアンは私の目の前に立って、ブーツのつま先で顎をくいっと持ち上げる。

私は、なすすべもなく、彼を見上げた。

「俺を殺そうとしておいて——そっちは殺さず逃がせて？　ずいぶんと虫のいいお願いだなあ。聞ギルド——黒鴉同盟の女幹部さんよ？」

ルシアンはしゃがんで、あざけるように私を見下ろした。

——ミア、ノエル、ごめんね。

「そうだ。私は女幹部。捕まえてお前の功績にすればいい。けど、その二人は取るに足りない手下だ。捕まえようが逃がそうが大した違いはない。だから——」

「だから手下は逃がしてくれて？　……それはお前の次第だな？」

「……私？」

ルシアンは、両手を広げた。するとそこに、まがまがしい黒い首輪が出現した。

「そ、それは……」

「これはな、俺が10年間魔力を込め続けた……魔具・服従の首輪だ」

パチパチ、と微細な電流を放ち、首輪は黒光りしていた。明らかに、強力な魔力が宿っている。

「この首輪をつけた者は、魔力を封じられ、生涯俺に絶対服従の奴隷になる。一度首にはまったら最後——死ぬまで外せない仕組みだ」

ルシアンはカチ、と首輪の留め具を外して開いた。

「お前の悪事を心から反省し——この首輪をつけて罰を受けるというのなら、手下を見逃してやってもいい」

首輪が——顔の前までつきつけられる。



ルシアンは屋敷の裏口から放り出されたノエルは、ボタンとしまった扉に中指を立てて悪態をついた。

「クソッ……貴族の犬め……ッ。ミア、ここはいったん引くよ」

ミアとノエルは歯噛みしながらも撤退を選んだ。

「必ず助けに来ますから……ッ！」



「おい、俺が帰ったぞ」

ボタン。寝室のドアが開いて、ルシアンが帰ってきた。

首輪の支配のせいで、ルシアンの言いつけには逆らえない私は、立ち上がって彼に一礼した。

「お……かえりなさいませ、ルシアン様」

すると彼は嬉しそうに、私の首輪をくいつと引っ張った。

「はは、従順だな。この首輪の味はどうだ？」

イヤなやつ。

そう思いながらも、ルシアンの機嫌を損ねない事を口にする。

「……快適です、ルシアン様」

すると彼は顔をしかめて命令した。

「敬語はやめろ。様づけもだ。ルシアンでいい。ほら、呼べ」



「……ルシアン」

すると彼はとたんに笑顔に戻って話し出した。

「お前を捕まえた教会に報告したら、おおいに褒めてもらったぞ。処分は俺に一任するそうだ」  
ルシアンは、白と青のかつちりとした騎士服から普段着に着替え——ソファに座って、にやにやと私を見つめていた。

「さて、お前をどうしようか？」

——覚悟は、できている。

牢に入れられようが、電撃で痛めつけられようが、構わない。

「……私が貴族に損害を与えたのは事実よ。好きに罰を与えればいいわ。抵抗なんてしない」  
にやにやしながら、ルシアンは立ち上がって私の方へと来た。

「ふうん……じゃ、どんな罰がいい？」

「どんなって……」

ルシアンが私の顎を掴んで、顔を近づけてくる。

「お前、変わったな。昔はクラスのマドンナだったのに——男みtainな粗野な恰好をして、肌も髪も荒れて」

くっ。悪かったですねえ。貴族様と違って、こっちは見た目に構っている暇なんてないのよ。

ルシアンは髪も肌も美しいままだし、服装だって高級品だ。

「ルシアンは、相変わらず綺麗ね」

皮肉を込めて、のぞき込んでくる彼にそう言ってやる。

するとルシアンは、驚いたような顔をしたあと、ぱっと私の顎から手を放した。

その頬が、なぜか赤い。

「……どうしたの？」

するとルシアンは、頬を赤くしたまま私に指をつきつけた、

「お、教えてやる……！ お前の罰は、ここで俺に仕えて、俺の奴隷になることだっ！」

再びどさっとソファに座った彼は、私を上から下までつらつと見た。

「まずは身体を洗って、その薄汚い服を着替えろ。屋敷の景観が損なわれる」

ルシアンに追い立てられて、私はしぶしぶ浴室へ向かった。

なみなみとお湯のたたえられたバスタブに肩まで浸かっていると――ドアの向こうから、ルシアンの声が聞こえた。

「おい、首輪はずれないからな。上手く服を脱げよ」

「わかってるよ」

バスタブに浸かったまま返事をする、浴室にほわんと声が響き渡る。

彼はドア越しに笑い声を漏らした。

「……お前今、素っ裸に首輪一つで風呂に浸かってるわけか。くくっ……まるで犬だ。傑作だなあ」  
――最低。

ルシアンの嘲りにげんなりして、お風呂から上がる。衝立の前に、ルシアンが用意した服が置いてあった。絹のシュミーズと、レースの下着一式を身に着ける。しかし、それだけだった。

「あれ、服がない……」

けど、ないものは仕方ない。私はため息をついて浴室を出た。

「よし：来たな。お前には贖罪にふさわしい服装をしてもらうからな」

そう言って、ルシアンはばさつとかさばりそうなドレスを広げた。美しいけれど清楚なデザインで、白と青に、金の縁取りがされている。

あれ、この色って……。

「そう。俺の騎士服とお揃いだ！ 悔い改めるにはもってこいの服だろう。それに——」  
ルシアンは私の姿を見て、わずかに微笑んだ。

「お前の黒髪に、この色はきつと映える。ほら、着せてやるから来い」  
ルシアンはコルセットを手にとって、私の腰に回した。

（う……苦しいな……）

きりきり締め上げられるのを我慢していると、ふと、ルシアンが私の背中をなぞった。

「よく見たら……お前の身体、傷だらけだな。なんで綺麗に治さない」

首筋に、肩甲骨に、様々な傷あとを、ルシアンは指先で確かめた。

「生きていくのに支障はないから」

「バカなことを。見苦しいから治すぞ」

ルシアンの手から、治癒魔法の光が沸く。

「いや、いいよ」

ルシアンの目が不機嫌そうに細められる。

「…俺に治されるのは嫌だ？」

「そうじゃなくて、治癒魔法って貴重でしょ。無駄遣いしなくていい。それに——」  
私は傷に触れて微笑んだ。

「傷は勲章でもあるよ。これはノエルを助けた時の痕。こっちは——つつ」

その瞬間、首輪に軽く電流が走って、おもわずソファによろける。

「つ……」

「俺の前で、他の奴の名前を呼ぶな」

ひどく低い声。ルシアンは私の背後のせもたれに手について、脅すように顔を近づけた。  
なんで？ わけがわからないけど、私は彼をなだめた。

「お、落ち着いて……わかったから」

身じろぐと、シュミーズの肩ひもがはらり、と落ちた。

コルセットとブラジャーで締め上げられて、ぎゅっと寄せて盛り上がっている胸が、ルシアンの目の前にさらされた。

「あ……」

それを見たルシアンは固まって、ものすごい目をした。

まるで、生肉を目の前した、断食明けの熊みたいな目だった。

「ルシアン……？」

呼びかけるが、聞こえていないみたいだ。

「ふーっ……ふーっ……♡」

獣みたいな呼吸。ルシアンの目線は、私のむき出しになった鎖骨と、胸あたりに釘付けになっていた。

衝動を押さえつけるように、その拳がぎゅっと握られている。

「ど……どうしたの？」

聞くと、はっとしたようにルシアンは目を見開いたあと、苦し気にあえいだ。

「は——っ、は————ッ♡ くそ、誘惑……ッ、しやがって……ッ」

握っていたルシアンの手が開いて、震えながら、私の胸へとのびる。

心臓に電撃する気か。私は身構えた。しかし——。  
むにゅん。

「は……♡ あッ……や、やわからか……い……♡」

ルシアンの手が、下着越しに——私の胸を掴んでいた。

「だ、ダメだッ……けどっ、ああ、クソッ……♡」

その瞬間、ふと、あんなにきつかった首輪の支配の力が、ふと、緩んだ。

(えっ、どういうこと?)

驚いて首に意識を集中しようとするけれど——ぎゅっ……と、太ももに固い何かが押し付けられて、意識がそっちに向く。

(あ……勃ってる……)

この意味がわからないほど、私も子どもじゃない。

「はぁ♡ はぁ……ッ♡ もう……ッ♡♡ だ、抱く、からなッ♡ お前のことッ……♡」

ルシアンが、近づいてくる。

潤んで発情したまなざしを浴びて、私はあきらめて目を閉じた。

仕方ない。素数でも数えて、いつとき我慢していればいい。

今の私に、拒否という選択肢は残されてないのだから——。

しかし、ため息をついた私を見て、ルシアンは動きを止めた。

「な……なんだよ、その顔は…ッ」

「え？」

ひどく傷ついたような声が聞こえた気がして、私は目をあけた。

すると、ルシアンは私の上からどいて、乱暴に背を向けた。

「……ふ、ふん！ 誰がお前なんて抱くかよ！ か、からかっただけさ。バカめ…ッ」

ルシアンはつかつかと歩いてドアを開けた。

「…どこ行くの」

するとルシアンは振り向いて吠えた。

「お前より美人を抱いてくるッ！ 言っておくが、俺は女には不自由してないんだからなッ！」

ボタン。大きな音を立てて、ドアが閉まった。



「くそっ、くそっ……あの女めッ……」

心配そうな執事を振り切って、馬車へ乗って街へと来たけれど、気持ちには晴れない。どころか――目の前に彼女がいるのに、何もできなくて、ムラムラが募るばかりだ。

「は――ッ、くそ、なんでさつき、手を出せなかったんだ……ちくしょう……」

魔力を封じているのだから、手を出すのは簡単なはずだった。

けど、押し倒されて、自分が何をされるか分かった後の彼女の目――。あれを見て、手が止まっ

てしまった。

（なんだよ、嫌なことを仕方なく受け入れるみたい……あの目！ 俺とするのはそんなに……）

「そんなに嫌かよ、ビッチめ……ッ」

思わず出た悪態が、情けなく震えていてさらに惨めな気持ちになる。

「バカにしゃがって……ッ。ああいいさ、お前なんて抱いてやるもんかっ……」

抵抗されるより軽蔑されるより、あきらめた目をされるが、一番こたえた。

「くそ、でも、ずっと勃ってる……」

彼女の入浴中も、コルセットを閉めているときも、俺のものは勃起しつづけていた。

目をつぶると、下着姿の彼女の姿が瞼の裏に現れる。

ずっとずっと想像していた制服の下の身体。傷だらけの柔肌に、触れると蕩けそうだった、胸の感触——。

「旦那様、つきました」

御者が馬車を止めたので、降りる。

娼館などに来るのは初めてだが——そう、外見だけでも、彼女に似ている女を抱いて、この苛立ちをどうにかすればいい。

が……。

「う……嘘だろ……」

いざ、黒髪美女の娼婦と向き合うも——股間はびっくりとも反応しないどころか、まったく違う事が気になった。

ベッドで待っている娼婦——彼女と同じ黒髪なのが、なまじ良くなかったのか。娼婦の姿が、

彼女の姿とダブる。

あいつは、この娼婦のように、すでにベッドで男を受け入れた経験があるんだろうか……？ と。

（いや、闇ギルドの女幹部だぞ？ 普通に考えて、生娘なわけが…）

そう気が付くと――妄想の中の彼女が、知らない男と抱き合いはじめた。

俺に対しては目を閉じて諦めた彼女が、闇ギルドの頭領だか同僚だか――チンピラの男に対して、笑顔で両手を広げる。

知らない男が、彼女の身体を好きにする。俺が10年間垣間見ることすらできなかった彼女の服を脱がせ、乳房を揉みしだいて、俺が未だに触れられない、桃色の唇に唇を重ね――。

そう想像した瞬間、俺は膝をついて吐いていた。

「うゝッ……おええッ」

「ま、まあ！ 旦那様、どうなさいましたかつ！」

「う……す、すまないが……服を着てくれないか……」

すると娼婦の彼女はプロの接客業らしく、すぐにバスローブを羽織って、俺をソファに座らせて、につこりした。

「ご気分がすぐれないのですね。もしかして旦那様――何かお悩みを抱えてらっしゃいますか」

「な……んで、そう思うんだ」

「たまにいらっしゃるんですよ。誰かの代わりを求めて、こちらに来る殿方」

「べ、別に代わりなんか……」

「きつと黒髪の方なのでしょう？ 叶わないお相手――人妻、とかですか？」

そう言われて、俺は首を振った。



「いや、人妻ではない……だが……そうだな、簡単にはいかない相手だ……」

「あら、そうなんですね。いったいどんな方？」

「……とてもいけ好かない女だ」

「まあ」

彼女はクスクス笑った。

「君みたいに美人でもない。だけど……だけど」

俺は膝の上でこぶしを握った。

「10年間、忘れられなくて……ッ」

すると彼女は、優しくいった。

「その気持ち、お相手には伝えているのですか？」

「いや………言っていない」

「まあ！」

彼女は驚いたように口を手で覆った。

「だって……い、言ったって……あいつは俺の事なんか……」

「そんなことありませんわよ！」

驚くほどぎっばりと、彼女は言い切った。

「その気がなくとも、真心さえあれば女ごころは動くことがありますもの。言ったほうがいいですわ。ねっ」

結局、お代はいいですわ、と言われて、俺は童貞のまま娼館を後にすることになった。

◆  
「こちらの肖像画が、旦那様のご両親でございまして。旦那様が10歳の時に、流行り病でなくなってしまったのですが。小さい旦那様、今と変わらないでしょう？」

「そ、そうですね……」

品の良い笑顔を浮かべて解説をしてくれる老執事・エドワードさんに、私はとりあえず控えめにあいつちを返した。

その後——ルシアンが怒って出いってしまった後、彼が挨拶に来てくれて、ドレスを着るのを手伝ってくれた上に、食事まで世話してくれたのだった。

（ありがたいけど……は、話がちよつと長いわ……！）

が、ふと、肖像画の隣に飾ってある謎の物体が、私の目を引いた。

「あの、エドワードさん。あの額縁の中に飾ってあるのは一体……？」

「こちらは……旦那様の大切な思い出です」

額縁の中に収められていたのは、色褪せた紙切れだった。

「魔術学校の近くの、クレープ屋の包み紙でございます」

そう言われて、不意に記憶がよみがえった。

「そういえば見覚えがあります、懐かしいなあ……」

「ぼっちゃ……旦那様は、放課後、隣の席のあなた様にさそわれて、お二人でクレープを食べに行ったことがこのほか嬉しかったようで。笑顔で何度も、あなた様との体験を語ってくださいま

した」

…そういえば、そんな事もあったつけ。

「旦那様は一人っ子で、内気な質で……。聖騎士の跡継ぎで勉強三昧という事もあって、なかなか同年代のお友達と遊ぶ事など、できなかったのですよ」

しみじみとエドワードが語る。

「ご両親を早くに亡くされてからは、いつも暗い表情で……。それが、魔術学校であなた様を出会ってから、どんどん明るくお変わりになって」

「そう……。ですね。彼とは最初は……。良い友人でした」

魔術学校で出会った頃の彼は、優秀だけれど、たしかに内気なクラスメイトだった。聖騎士の跡継ぎという立場もあってか、クラスメイトたちからも少し遠巻きにされていた。

そんな事は何も知らなかった隣の席の私が話しかけたら、最初はビクビクした顔をして――でも、嬉しそうにいろいろ話してくれた。

それで私はある日、彼をクレープ屋に誘ったのだった。一口食べて、彼は目を白黒させていた。『あ、甘い……。！　すごく美味しい……。！』

まるで初めて甘いものを食べた小さい子みたいに目をキラキラさせて、その純粋な表情を眺めていたら、ふいに目が合って。

『あ、ありがとう……。君と来れて、うれしい……。』  
頬を赤くしながら、そうお礼を言ってくれたつけ。

……そんなこともあったのに、どうしてこんなことになってるんだろうな……？

「はあ……」

ひとり部屋に戻ったあと、ため息をつく。

っていうか、クレープのゴミを今に至るまでとっておくなんて……。

ちよっと異常な気がする、ような……。

なんだか背筋が寒くなって、私は思わず両手をこすり合わせた。

そこで、いつも腕に嵌めていたギルドのバングルがない事に気が付いた。

「そうだ、バタバタして、お風呂場に置いてきちゃったんだった」

今は魔力を封じられているので使えないが——あのバングルがあれば、遠くにいる仲間との連絡も取れるのだ。

見つかってどうにかされる前に、こっそり回収しなければ。

私はお風呂場に向かった。



娼館から屋敷へ戻ると、どっと疲れた。

部屋に一人戻る。彼女はとも、エドワードに誘われて食事中的ようだ。

「シャワーでも浴びるか……」

吐いたし、娼館のきつい香の香りが染みついているし——とりあえず、風呂場へと向かう。そこで、俺の目は脱衣籠に釘付けになった。彼女の脱いだ服……。

——本能的に、手が動いていた。

「あっ……あつた！」

服の下に慎ましく隠されていた下着を手にとって——思わずつぶやく。

「くくくく……色気、ないなあ……ッ♡」

そっけないが機能的な、白いハーフトップとパンツ。

「あいっらしいな……♡ はぁ♡ はぁ♡」

彼女の胸を覆っていた布に、思わず顔をうずめる。

「ん……ッ♡ は♡ 石鹸と汗の香り……ッ♡」

わずかに残った彼女の匂いに、頭が沸騰しそうになる。

当然——下半身のモノはビキビキに勃起あがっていた。

「パンツは……♡ はぁ♡ お♡ あ、甘い匂い……ッ♡」

たまらず、性器に手がのびる。

匂いを嗅ぎながら、ちんぽをしごく手を上下させる。

「はぁ♡ こ、これがッ♡ あいつの、おまんこの匂い……ッ♡」

しこ♡ しこ♡ 反り返ったちんぽを抜く手がどんどん早くなっていく。

「く♡ あ♡ ビッチめ……♡ 俺のこと殺そうとしたくせに、おまんこからこんなエロい匂いを  
させやがって……ッ♡」

すう……ッ♡

思い切り匂いをかぎながら手を動かすと、簡単に尿道に精液がせり上がってくる。

「あ、♡ ずっと我慢ッ♡ してたからッ♡ もうッ♡ で、出そうッ♡ 出るッ♡ はぁあッ♡  
お前のパンツに出すぞッ……！」

その時、信じられない事が起こった。

ボタン。

ドアが開いて、本人が入ってきたのだ――。



「な、何やってるの……」

お風呂場の中にルシアンがいて、私の下着を握りしめ、全裸でちんちんを握っていた――。

「なっ……お、お前ッ……」

ルシアンは固まったあと――ぱつと股間をタオルでかくして、真っ赤になって叫んだ。

「ノックしろよ!!!! バカッ……!!!!」

あれだ。男子の息拔きの現場に立ち会ってしまった。

こういう時は冷静になるに限る。

私は背中を向けてドアを閉めようとした。

「ごめん。いると思わなくて。続きをどうぞ……いや」

一つだけ、釘をさす。

「でも私の下着を使うのはやめて……」

おかずなんて、他にいくらでもあるだろう。

「なっ……!! こ、これは! 違うからなッ!!!!」

ルシアンが吠える。

私はめんどくさくなって手を振った。

「ああ、わかったよ。じゃあもういいから」

先程ちらりと見てしまったルシアンのは身体は――鍛え上げられた彫刻のような、立派なものだった。きつとさぞ、精力を持て余しているんだろう。

それにしても。

「すごいパワー……さっき女を抱いてきたんじゃないの……？」  
ぼそつとつぶやくと、ぐうう、とルシアンが唸る声が聞こえた。

「くそっ……ううう、ダメ、だったんだよっ……！」

「え？」

「娼館いったけど……！　できなかつたんだよっ！」

「なんで……調子悪かったとか？」

するとルシアンは、低い声でつぶやいた。

「ああ、調子なんてずっと悪いさ。10年前から、お前のせいで  
そう言われて、うろたえる。」

「わ……私のせい？　10年前って……」

思わず振り向くと、ルシアンは私をにらみつけていた。

「あの時！　なんで……俺を置いて、学校辞めたんだよ……ッ」

「は……え？」

突然そんな昔の話を出されて、戸惑う。

「なんで……なんであの時ッ……！　俺が止めるのを笑って、出ていったんだ……！」  
ああ、あの時。

——母の治療費のために学校を辞める私を、ルシアンは「お金なら僕が出すから」と引き留めた。

そんなこと、了承できるはずもなく断ったら、「闇ギルドに入るなら、見過ごせない」と決闘のようになり……結果、私はルシアンに勝って、校門を出た。

「……あの時のこと、まだ怒ってるの？」

大きくなったルシアンは、タオル一枚のまま、私をまだにらみつけている。

「ああ！ 怒ってるさ！ お前にもてあそばれて——」

そんなこと、した覚えはないんだけどな……

「だから俺は……聖騎士になったら、絶対に前をお前を捕まえると誓った！ ……10年間、ずっと闇ギルドの動向を探って……。やっと、前を捕まえる事に成功した——！」

私のため息をついた。

「そう、おめでとう。ならさっさと、憎い私を牢屋にぶち込めば、調子も戻ってくるんじゃないの」

すると彼は悪態をついた。

「お、俺がどんな気持ちでっ……10年間ずっと……！ くそつ、楽しいか？ 俺が苦しんでるのを見るのは……ッ」

「私に勝ったのに、苦しいの？」

憎い宿敵を捕らえたなら、普通は爽快なはずだ。

なのにルシアンは、歯を食いしばって私をにらみつけた。

「ああ……苦しいよ！ 目の前にお前がいるのに……触れられない……！」



「さつき触ってたじゃない。コルセットとか」

「そういう意味じゃない……ッ！ この鈍感女……！」

——つまり。

ルシアンは、私に触れたいと思っている？

「無理やりなら、できるでしょ。魔力、封じてるんだし」

するとルシアンは、ぎり、と唇を噛んだ。

「……したくない」

「……は？」

「無理やりしたら……お前は、俺を……本当に嫌うだろ……」

震える声だった。

「するなら……望まれて……したい」

思いもよらない言葉に、息が止まる。

「……それは無理かな」

「は……？」

「私は、あれ、あんまり好きじゃない」

「あんまり好きじゃない！？ やったことあるのか！？」

私は思わず吹き出した。

「聞ギルドの女幹部が、バージンなわけないでしょ」

ひゅっ、とルシアンが息をのむ。そして、絞り出すように叫んだ。

「……こんなの寝取られだ……！」

涙まで浮かべて、意味不明な叫びを上げる。

「クソッ、クソッ！ 鬱勃起してきた……。 もういい…お前を犯して、上書きしてやる……！」

がっとなを掴まれ、荒い息がかかる。

その股間は、しっかりとタオルを押し上げていた。

「落ち着きなよ……とりあえず抜いたら……？」

テントを張っているそこを、軽く指先で押さえる。

「おッ……♡ な、何すっ……♡」

ルシアンが身体を震わせた。

その瞬間、首輪の支配が——わずかに、緩んだ。

（……前もこんなことあった……やっぱり）

私は、確信した。

性的興奮が高まると、この首輪は制御がゆるむ。

——昔と同じだ。ルシアンは、詰めが甘い。

「それなら」

私は彼の顎に手をかけた。

「私が望んだってことで——セックス、する？」

ルシアンの瞳孔が、限界まで開く。

「へっ……え……？ な、な、なんで……ッ えっ……？」

その目が、揺れている。

「だって今、私は聖騎士様のモノなんだし」

掴んだ手で、顎の下を撫でてやると、ぶるっ、と大げさなくらい、ルシアンは身体を震わせた。  
「そっ……♡ そんな……いいの？ いいの？ほんとに？？♡」

「聖騎士様にだって……気晴らしは必要でしょ？ ルー」

「んおっ♡……おおっ♡」

突然びくびく♡ とルシアンが身体を跳ねさせたあと——必死の目で私を見た。

「やっ……やめてくれ……♡ いきなりその名前で呼ぶのは……♡」

「さすがに嫌だった？」

からかうように聞くと、ルシアンははぁ♡ と苦しそうに息をついた。

「嫌じゃない……いきそうになっただけ……」

そして、すぐるように、小さな声で懇願した。

「もっと、呼んで……♡」

裸のルシアンが、ベッドでもどかしく、私の背中のリボンと、コルセットをほどく。

「はーっ♡ はーっ♡ まさか今日っ……これを解くことになるなんて……♡ ゆ、指がもつれる……♡」

どろどろに蕩けた声で、ルシアンはずっと何かを言っている。

「ふ♡ は、ほどけたあ……♡ はぁ♡ うれし……♡ 記念すべき俺とお前の初めて……だから♡ 大事に優しく、抱いてやる、からな……♡」

コルセットから解放されて、私はふうとためいきをつきたい気分だったが——さっそく、布を

引きはがされて、下着姿にされる。

「はぁ♡ はぁ♡ ぬ、脱がせていいか♡ ぜんぶっ……」

自分でやる……という前に、ルシアンの手が伸びてきて、シュミーズを脱がし、下着を外した。ぶるん♡ とさらされた乳房に——ルシアンが目釘付けになる。

「は、ぁ♡ ゆ、夢にまで見た……ッ♡ お、お前の……お前のナマおっぱい……ッ」  
その震える手が、私の胸元にのびる。

「あ……♡ 綺麗……♡ 白くて……やわらかそう……♡ さ、触って、いい、か……♡」  
返事なんて聞かずに、ルシアンは私の胸をむにゅ♡ とつかんだ。

「はっ……♡ や、やらかい……ッ♡ むにゅって、指、うまる……ッ♡ あ、ぁ♡ すご……♡ 女の胸って……こんな、なんだ……ッ♡」

声が、蕩けてしまっている。

待って、女には不自由してないんじゃ、なかったの……？

「……初めてってわけじゃないでしょ？」

首をかしげると、ルシアンは拗ねたように白状した。

「……俺は、初めてだよ……っ」

「え、そうなの」

「だって……お前以外とか……考え、られないし……ッ」  
ん？ どういうこと……？

と考えていたら、ルシアン指先が、乳首をかする。ぶり、と妙な感覚が身体に走った。

「っ……♡」

「あ、何そのため息……♡ もしかして、ココ、感じる？」

気が付いたが最後、ルシアンは両手で乳首を摘まんだ。

「っ、う♡」

「あ、乳首……最初はふわふわだったのに、キュッ♡って固くなってきた……♡」

こり♡ こり♡

乳首を摘まんで、転がされると——そのたびにじん♡ と切ない感触が身体にはしって、私は身体をよじった。

「っう、や、やめ……ッ♡」

「え……何それ……♡ き、気持ちいい、の……？」

認めたくなくて、私は首を振った。

「も、もうやめて……ッそこ！」

するとルシアンが、くす、と笑った。

「どうした♡ 俺との対決でも冷静だったくせに、そんな焦った声出して……♡ さてはお前、」

キュッ♡ 乳首を扱くように摘ままれる。

「うっ……♡」

「あんまりこういう事——されたこと、ない？」

甘い声で、からかうように言われて——かっとなって言い返す。

「だから、言っただでしょ!! こういう事、あんまり好きじゃな——ッあ♡」

摘まんだまま、乳首を柔らかくくにくに♡ されて、またそこが切なく疼く。

「へえええ？ 好きじゃない？ なんで♡？ 教えてよ♡」

「うッ♡ く……ッ♡ と、とにかくもう、そこを触るのやめてっ……♡ はやくっ……い、入れて出して終わらせて！」

「ふう……ん、それがお前の『セックス』なんだあ……？」

「かりかり♡ かりかり……♡ 指先で乳首を優しく擦られて、無意識に足をこすり合わせてしまふ。」

ルシアンが、私の耳元に唇を近づけてささやいた。

「お前、痛みには強いくせに——気持ちいには弱い……んだな？」

「くっ……よ、弱くなんてない……！」

キツと反論すると、ルシアンの顔が——嬉しそうな、淫蕩な笑みを浮かべた。

「へええ♡ へええ……♡ く、ふふ♡ 嘘だろ……♡ お前に、そんなカワイイところがあったなんて……♡」

熱い舌で、耳朵をぺろり、と舐められる。

「ひっ……♡」

「は……♡ やばい♡ ありえないくらい興奮してきた……ッ♡♡♡  
くちゅ♡ ぬちゃ……♡♡ 耳元で、湿った音がダイレクトに響く。

その感触に——腰が震える。

「っ……♡」

「安心しろよ♡ 入れて出して終わり、なんて絶対しない……♡」  
こす♡こす♡ 乳首を擦られながら、耳をチュッ♡ と吸われる。

「お前の身体——俺の舌が触れてないところがなくらい、ぜんぶぐちゅぐちゅに蕩かして、たっぷり気持ちよくしてから——入れるから♡」

低い声でいやらしくささやかれて——背筋にぞくっ♡と震えが走る。

「まずはここから……♡」

ふいに耳元から彼が離れて、乳しぼりみたいに——胸をきゅっと掴まれた。

「お前のおっぱい、いっぱい味わってやるからな♡ あむ♡」

「ひ……♡ あうっ♡」

ルシアンが口をあけて、乳首をくわえ——ちゅうちゅと吸いだした。

「ん……ちゅっ♡ ちゅっ♡ んむう♡ おいし♡ お前のおっぱい……♡」

れろれる♡と慰撫するように、熱い舌が乳首に這わされる。

「んっ♡ うう、や、やめ……ッ♡」

ぬるぬるとした熱く、しかし優しい刺激に、足の間が意志に反して、むずむずしてくる。

「はあ♡ ちゅっ♡ ちゅ♡ お前の乳首……固くとかって……はあ♡ 今にもお乳出そ……♡」

「もっ、や、やめっ♡ ほんとにいつ！」

必死の抗議をすると、ルシアンはもう片方の乳首をキュッ♡と摘まんだ。

「あ♡ ごめんごめん♡ こっちのおっぱいが寂しいよな♡」

くに♡ くに♡ ちゅ♡ ちゅっ♡

両方の乳首に違う刺激を与えられて、いよいよ下腹部が焦れ焦れとしてくる。

「ひう♡ ち、ちがッ♡ ああッ♡」

はしたない声が口から漏れ出て、ぎゅっと唇を食いしばる。

「こら♡ 声、我慢しちゃダメだぞ♡」

ちゅぶ♡ ちゅぶ♡

唇をすぼめて、乳首を思い切り吸われて——私の身体はわなないた。

固くなってしまった乳首が、ぐにぐにとルシアン唇の中で揉みしだかれる。こらえきれず——

「ひうッ♡ ああッ♡」

さきつぽばかりを虐められて——そのもどかしさに、膝頭をこすり合わせる。すると、足の間にくちゅ、と濡れた感触がして、ぎよつとする。

(う、嘘、こ、こんな——ッ)

ルシアンは私のその驚きを見逃さず、足に手をかけた。

「足こすりあわせちゃって、どうしたの♡」

「どうも……してなっ……♡」

まずい。濡れてるなんて、絶対にルシアンに知られたくない。

私はルシアン腰の腰のモノを見た。鍛え上げた腹筋につくくらい、思い切り勃起している。

「は、はやく入れてよ……それ、辛いでしょ……？」

「くゝふふ♡ だめ♡ その手には乗らないよ♡」

ルシアンはぐつ、と力を込めて、私の閉じた足をこじ開けた。

「いつ、イヤッ……」

「10年間さんざん待ったわけだし、あとちょっと待つなんて、ぜんぜん苦じゃないんだよな♡ それより……♡」



ルシアンが、足の間に身をかがめる。

「な、何をッ……！」

「お前多分さあ……イッたこと、ないよね？」

正直に認めるのは癪で——そっぽを向いて、吐き捨てる。

「別になくたって、生きるのに支障ないでしょッ」

けれど、私の悪態に、ルシアンは楽しそうに笑った。

「えゝ♡ 知らないの？ 女の子の身体って、いくとすつごく気持ちいいらしいよ♡ イカせて

くれた男のこと、好きになっちゃうくらいに……♡」

「そんなわけ……」

私は反論したが、ルシアンはとりあわずに嬉し気だった。

「ふふ♡ イカされた事ないって、実質処女だよ♡ 今日俺が、お前の処女もらうからな

……♡ 俺のかわいいねんねちゃん♡」

「やめっ……」

くばあ♡ と指先で、割れ目を開かれてしまう。

「お……♡ これが、お前のおまんこ……♡ 本物……♡ ピンク色で、むっちりしてて……はあ

……かわいい……♡」

開かれたせいで、愛液がとろり、と膣口からこぼれてしまう。

ルシアンは指先でその液体をすくった。

「ちゃんと濡れてんじゃん……♡ ふふ、嬉しいよ♡ さっきの気持ちよかった？」

ぺろ、とその指先を舐められて、血の気が引く。

「ひっ……何してんのッ……!!」

「ん……♡ お前の味がする……♡ はは、何引いてんの？ これから直接舐めんのに……♡」

えっ、と思う間もなく、ルシアンが足の間に顔をうずめた。

「んふ♡ ここ、クリトリス……♡ 女の子が気持ちよくなっちゃうと♡ ちゃんとお前のおまんこにもついてるんだな♡ たっぷり可愛がってやるからな♡ はあ♡ はあ……♡」

ちろ♡ と、膣口の上にある小さな肉の塊を舐められる。

「ひっ……!?!♡」

その瞬間、感じたことのない、びりつとした快感が、そこに走って、おののく。

「やっ♡ なッ……何ッ♡ これ……ッ」

「え♡ ここ舐められるのも、初めて……?」

「そっ、そんなこと、するわけないでしょっ……んあッ♡」

「え……♡ このクリちゃん、俺が初めて舐めたんだ!? フフ♡ええ……♡」

ちろ♡ ちろ♡ 可愛がるように、舌先でクリトリスのさきっぽをくすぐられる。

「やっ♡ あッ♡ ダメッ♡ そんなとこッ♡ ああッ♡」

「可愛い声……♡ そっか、そっかあ♡ じゃあこれから俺が、処女クリちゃんに、たっぷり気持ちいの教えてやるからな……♡」

れろ♡ れろ♡ れろ……♡

敏感なクリトリスの先も、横の部分も——くまなく舌を這わされて、意志に反して足が震える。

「ねんねちゃんだから……♡ 優しく教えてやらないとな♡」

この上なく嬉し気に、ルシアンは舌を動かしていた。

童貞のくせに、どうして——こんなことができるんだろう？

「ひっ♡ ううッ……♡ なんでっ……こんなっ……♡ あ、初めてじゃっ……なかったのっ……」

「ん〜？ 聞教育で、一通り習うからな♡ クリトリスの仕組みも、おまんこの感じる場所も♡ 座学だったけど♡」

舌を密着させて、クリトリスの上から下まで、舐められる。

「うっ、嘘ッ……ああんッ♡」

「貴族は、世継ぎを作る義務があるからな……♡ 知ってる？ 奥さんをたっぷりイカせて、気持ちよくさせた方が——男児が生まれやすいんだって♡」

れろ♡ れろお♡ れろお……♡

熱い舌に、舐め溶かされるようにクリトリスを慰撫されて——だんだん、くすぶっていた快感が、じくじくと大きくなっていく。怖いくらいに——。

「やッ♡ ああ♡ も、もおッ♡ やめえ……ッ♡」

「こうやって、女の子を気持ちよくさせる方法を、教科書で習いながら——俺、ずっと妄想してたよ。お前が俺の奥さんになって、こうやって気持ちよくさせられたらなあって——♡」

チュッ♡ チュッ♡ と、唇を尖らせて、軽くクリトリスを吸われて——♡

「やああッ♡ それイヤあッ♡ も、やめッ♡ やめてえッ♡」

「フフ♡ 声が切羽詰まってきた……♡ ねんねのクリちゃんも、キュッと尖って……♡ わかるよ♡ そろそろイッちゃいそうなんだな♡」

ちゅぶ♡ ちゅぶ♡ ちゅぶ♡



「違う……ッ。こんな……快感で……正体を失うなんて……な、情けないから……ッ」

「情けない？　なんで……？　そっか、部下もたくさんいる、強い強い女幹部だったから？」

「そんなじゃない……ただ……」

強くなければ、と常に気を張っていた。母も、部下の命も、自分の肩にかかっている。「他人の前で……弱った顔を晒すのは……抵抗感がある……」

言っていて、情けなくて嫌になる。

すると、ルシアンは目を見開いたあと——ぎゅっと私を抱きしめた。

「ああもう、ほんと——嘘でしょ、お前……そんなこと言われたら、俺の心臓おかしくなりそう……ッ」

「は……？」

「お前はいつだって強くて、賢くて、俺の一枚上手で……」

突然の抱擁に、私はフィを突かれて固まった。

「でも……お前はお前で、母さんのために、って……ひとりですつと頑張ってきたんだもんな」  
耳元で優しくささやかれる。

「わかるよ。自分一人に責任かかってるって、しんどいよな。でも……」

ルシアンが私の目を見る。

驚くほどに——優しい目。

「俺は……お前がその弱った顔、俺だけに見せてくれるのが、たまらなく嬉しい……」

「……っ」

「俺にだけは見せてよ？　俺だけでいい。俺の前でだけは——お前の弱いところ、隠さなくていい」

い。見せてほしい」

なんで。ルシアンのかせに。

ふいに胸が痛くなつて——けど、素直にうんなんて言えなくて、顔をそらす。

「ふ……意地っ張り……♡ でも……そんなお前がかわいい……」

「く……」

呻いた私を見て、ルシアンはわらつた。

「こんなのまだまだ序の口だから♡ これから死ぬほどイかせてイかせてイかせまくつて——お前の身体に、俺のこと覚えさせるからな……♡」

その目は肉食獣じみていて、ぞくッ♡ と背筋に、恐怖か快感かわからない震えが走る。

「っ………!!」

ルシアンは、今度は私の蜜口をくつ、と開いた。

とろり、と愛液が滴る

「まって……な、なにを」

「お前が、俺のちんぽでちゃんと気持ちよくなれるように——ナカ、たっぷりほぐしてやるから♡」

つぶ♡ と中指が、陰唇を割って、ナカへと入ってくる。

「つぶ……ッ♡」

「は……ナカ、けっこう狭いな……♡ けど、愛液でトロトロに濡れてて、きつつきつ……ほんとに、慣れてないんだな……ッ♡ はぁ♡」

「く……ッ♡う♡」

ぬぷ♡ つぷ♡

ルシ안의指が、ナカをさぐるように、内壁を押す。

すると、お腹の奥が、何かを求めてわなないて、私は戦慄した。

嘘だ……私の身体、こんなじゃ……

「あ♡ お前のおまんこ、ちゃあんと俺の指をくぶくぶ締め付けて……ッ♡ えらいぞ♡ ねちゃん♡」

くっ、とナカから手前側に指を曲げられて、今まで知らなかった快感が、そこに走る。

「あッ……♡」

「みいつけた♡ ちょっとざらつとしたココ……♡ 女の子のナカのいい場所、そのいち♡」

ぐッ♡ ぐッ♡ ぐッ♡

その場所を連続で押されて、どんどんお腹のナカが熱くなっていく。

「はっ♡ あッ♡ お。おッ」

「お♡ とぷん、って愛液こぼれてきた……♡ なんだ♡ 素直でカワイイじゃないか……お前

のおまんこ……♡」

聞かれて、恥ずかしさに死にたくなった。

「くッ♡ お♡ もッ♡ やめッ♡ もうッいいからあッ♡」

けれど、ルシアンはナカを弄るのをやめなかった。

「だから、言ったでしょ？ お前をイカせまくるって♡ それがセックスってものだよ、ねんねちゃん♡ ふふ♡」

指を差し入れながら、彼の顔が、また足の間に近づく。

「舐め舐めしながら、ナカくぼくぼしてあげるから♡」

ちゅ……♡　ちゅ♡

クリトリスが、その唇に含まれて——甘ったるく吸われる。

「やっ♡　あ♡　いったばっか♡　なのにいッ」

一度いッて敏感になったクリトリスを愛撫され——さらに、ナカの感じる場所を、指でとんとんと突かれる。

「いッ♡　やあッ♡　もおッ♡　やめっ♡」

先ほどよりも簡単に、また気持ちよい頂上に、上り詰めていく。

「ふふ♡　いい声……♡　もっと聞かせてよ……♡　こっちはどうかな？　クリちゃんのうしろっかわ♡」

クリトリスをちゅうちゅう吸われながら——指が、その裏側をぷに♡　ぷに♡　と撫でまわす。ぞくぞく——ッ、と、信じられないほどの快感が、その場所から拡散する。

「おあッ……ほッ……おッ」

だめ——それは、ダメッ！

「あ……♡　ナカきゅうつつて、指締めた——♡　いいぞ♡　ねんねちゃん、上手上手♡」

クリトリスの外側も後ろ側も優しく蕩かされるように責められて——

「やっ♡　も、おッ……ああ、あ~~~~~~~~~~~~ッ♡♡♡」

身体をのけぞらせて、ビクビク私は絶頂していた。

「あ……お……」

大きすぎる快感の波が、簡単に去らなくて——手指やつま先が、びくびく痙攣する。



指を動かしながら、ルシアンがうれしそうに言う。

「わ……♡すごい……♡ ナカ、ずっとわなないてる♡ 気持ちいい？ たくさんたくさん、イッていいからな♡ ほら♡ いくらでもくちゅくちゅしてあげるから♡」

絶頂にがたがた震える私に合せて、ルシアンは指の動きを緩め、優しくナカをなぞり——その唇は、甘やかすようにクリトリスをねっとり舐めた。

「ひゃっ……め……も、お、い……っ……っ……っ……っ……っ……っ……」

イッたばかりなのに、優しく煽られ続け——いつまでも、絶頂から降りれない。

「ふ……♡ さっきまでアクメ処女だったのに……♡ もう2回も3回もイッちゃったね……♡」  
「は……ッあ……ッおッ……♡」

もう、情けない顔を隠す余裕もなくなり——ただただ、苦しいほどの快感を、シートをぎゅっと握ってやり過ごす。

「よしよし♡ もう大丈夫だからな♡ 頑張ったな♡」

快感の波が小さくなって——やっとルシアンは、唇を放して、指をひきぬいてくれた。

ちゅぶん♡

引き抜くと同時に、透明な糸がおまんこから引いて——抜かれた部分の奥が、じん♡ と物足りなげに疼く。

嘘でしょう……これだけ、イッたあとなのに……。

「ふふ♡ おまんこ、これでたつぷりほぐれたな♡」

ルシアンは、重く勃起あがった男性器を握って、私に見せた。

「ほら……どう？ これからこのおちんぼが、お前のナカに入るんだ——」

反り返ったたくましいおちんぼの先端からは、透明な先走りが滴っていた。

「指じゃとどかない、お前のおまんこのもつと奥——いっばいどちゅどちゅしてやるからな……♡」

私が見ているうちにも、びくびく♡ 大きくなっていく。

——アレを、物足りなく疼いているおまんこの奥に入れられて、ごりゅごりゅされたら……。想像すると、ぞくり、と震えが走った。

「そ、そんな……の……ッ♡」

「怖がることない♡ 絶対痛くなんてしないから♡ やさしくゆっくり——俺のおちんぼの味、かわいい処女おまんこにわからせてやるから♡」

処女じゃない——と言いたかったが、ルシアンが私の足を開いて——おちんぼの先端をあてがう。

「はぁ♡ 嬉しい……夢みたいだ……♡ まさか、お前と……お前と俺が、こうやってひとつになる日が来るなんて……♡」

愛おしくてたまらない者を見るような、甘く蕩けたまなざしで——ルシアンが私を見下ろす。

「挿れるぞ……♡ はぁ♡ 誰にも見せたことない、カワイイ顔いっばい見せてくれ……♡」

くぶ♡ くぶ♡ と陰唇を割りひらいて、ルシアンが私が入ってくる。

「んぁッ♡ は……ッ♡」

「くッ♡ おッ……き、きつつ……♡ は、俺の、もってかれそ……♡」

ずぶ……と深くまでおチンポが刺さる。

「は……ッ♡ はいった♡ ぜんぶ……入ったぞ♡ お前のナカ……ッ」

言いながら、ぶるぶるつ、とルシアンは身震いした。

「お前のナカ、熱い……柔らか……あ、あ……気持ちいい……動いてもないのに……ッ♡ 頭とろけそ……♡」

ふ~~~~ッ♡ とため息をついてから、ゆっくり、ルシアンは動き始めた。

「はッ……おッ……♡ お前のがッ♡ 絡みついてくるッ……♡ つお♡ 処女のくせに……ッ♡」  
ルシアンは私の腰を掴んで、ゆっくりなじませるように腰をうごかす。

ぬちゅ♡ ぬちゅ♡ ぬちゅ♡ ぬちゅ♡

太くてたくましいおちんぼが、おまんこの奥を押し上げて——喉から声が漏れる。

「おッ♡ ああ、っ♡ おおおッ♡」

「あ、ッ♡ 締まッ……♡ は、ダメッ……あ、ッ♡ がッ♡ 我慢ッ♡ 我慢ッ……♡」

ぐう♡ と腰を押し付けられて、おまんこの奥をぎゅう♡ と押しつぶされる。

「おお、ッ……♡ ふっ、ふかしいッ♡」

ずぶ♡ ずぶ♡ ずぶ♡ ずぶ♡

小刻みに、けれど優しく腰を動かされて、奥の部分が、どんどん鈍い熱を帯びていく。

「はッ♡ だんだんッ♡ なじんできたッ……♡ お前んナカ、やわらかく、なってきた……♡ はッ♡ んおッ♡」

我慢できないというように、彼の腰の動きが速まる。

パンッ♡ パンッ♡ パンッ♡ パンッ♡

そのまま体重をかけて、思い切り打ち付けられて——たまらず彼の首に腕をまわして、しがみつく。

「ひぐっ♡ ああッ♡ お、奥ッ……やらあッ♡」

「ッ!? あっ♡ し、しがみ、つかれる、とっ……♡」

ぐむッ♡ と、ナカのが、もう一段階大きくなる。

ルシアンもぎゅっ、と私を抱きしめて、再び腰を振り始めた。

「は……ッ♡ あっ♡ ダメッ♡ 優しくッ…:できなッ♡ ああッ♡」

ずちゅんッ♡ ずちゅんッ♡ ずちゅんッ♡

たくさんほぐされて——今までにないほど、柔らかく熟れた内側の肉が——その怒張を包み込んで、ねっとり絡みつく。

「おッ♡ らめえッ♡ ほおおッ♡」

「はッ♡ 気持ちいいッ♡ お前と抱き合ってるセックス……♡ 妄想よりもずっと♡ お前のツナカッ♡ こんなにッ♡ 気持ちいなんて♡ と、と、めらん、ない…ッ♡」

ルシアンは夢中で腰をふりたくっている。

それでも、おまんこの奥は、待ちわびたおちんぽに喜んで——切なくきゅうきゅう、亀頭を締め付けてしまっている。

「はっ♡ お前は……ッ♡ お前は気持ちいい? 俺のちんぽっ……ちよつとでもっ……気持ちいいッ……?」

両手をぎゅっと握られて——おちんぽを打ち付けながら、どろどろに溶けた目で、ルシアンがそう聞く。

気持ちいい——。おまんこの奥を、固く滾ったモノでいっぱいになるのが、こんなに気持ちいいなんて——知らなかった。

「はッ♡ あッ♡う、うんっ……♡」

白みかけてきた頭で、必死にうなずくと、ルシアンが目尻が甘く下がった。

「ほんと？ 俺のちんぽ気持ちいい？ 嬉し……嬉しいッ♡ もっといっぱいッ♡ たべさせてやるッ♡ かなッ♡」

ずぼっ♡ ずぼっ♡ ずぼッ♡

抽送が、一段と速まる。

ものすごい勢いでおまんこの奥が押しつぶされて——頭が白みかける。

「ひぁ、あぁっ♡」

「はぁッ♡ 俺ッ♡ なんでもするッ♡ お前のためならっ♡ どんなことだッ♡」

ずちゅんッ♡ ずちゅんッ♡ ずちゅんッ♡

体重を乗せて、思い切り、子宮口が潰される。

「〜〜はッ♡ おッ♡ らめ……えっ♡ もおッ♡ ナカぁッ♡ ごりごりっ♡ おッ♡ おかしくなるッ♡」

奥をどちゅどちゅ突かれて、お腹の底が熱くてたまらない。

膨れ上がった欲望が——もう、解放されてしまいうさだ。

「んお♡ おまんこが……ぎゅーって締まって……ッは、イキそ？ イっちゃいそうか？」

「う、うんっ♡ は、あぁ、あッ♡」

ルシアンは嬉しそうに腰を振り続けた。

「はぁ♡ はぁッ♡ イイよっ♡ イって♡ イって♡ 俺のでイって♡ 俺の種いっぱい飲んでッ♡」

ぐううううッ♡ と思い切り、おまんこの奥におちんぽを突き立てられる。

「すきッ……♡ 好きだよ♡ 好きッ♡ あッ」

太い男性器の先端が、容赦なく奥を突き上げて――

私はぎゅつと彼にしがみついて、名前をよんだ。

「る、るう、ルーっ……♡ あっ、もうっ♡ いっ♡ いああ~~~~~っ♡」

まぶたの裏に星が散るような衝撃に、目がくらむ。

太く固い彼のものを思い切り食いしめて――媚肉がきゅんきゅんとわなないて、私は絶頂を迎えた。

「おッ♡ おおッ♡ イグッ♡ 出るッ~~~~~……♡」

同時に、奥でルシアンが、熱い精液を吐き出した。

「あッ♡ は~~~~~っ♡ は~~~~~っ♡」

ルシアンが、深いため息をついて――顔を上げた。

「ふ、うれし……ッ♡ は♡ あ♡ お前の身体、熱い……♡」

身体が深い快感と、倦怠感に包まれて――私は呼吸するのがやっとだった。

――セックスって、こんなに体力を使って、消耗するものだったのか……。

はあはあ呼吸を繰り返していると、ルシアンは再び、私の身体をぎゅつと抱きしめた。

汗でしっとりした肌と肌が――密着して、どうにも心地よい。

「はあ♡ もうちよつと……もうちよつとだけ、お前とくっついてたい……」

そして、じっと私を見下ろして、私の髪をさら、と梳いた。

「ふふ、汗かいてるな……俺もお前も」

その髪に、ちゅ、と軽くキスされる。

「はあ……お前が……俺の腕の中に、いる、なんて……」

ふいにルシアンが、ぎゅっと目を閉じる。

「夢みたいだ……ねえ、俺の頬つねってくれない？」

「ど……どうして……」

「お前と抱き合って愛し合う夢、数えきれないくらい見た——これも夢、かもしれない」  
その目の端から、透明な雫が零れ落ちる。

「ああでも、夢なら覚めたくないなあ……」

そう言われて、私はとりあえず彼の頬をつねった。

「……これは現実だよ」

すると彼は、頬に添えられた私の手をぎゅっとつかんで——震える声で、うなずいた。

「う、うん……」

ルシアンの熱い涙が、私の手を濡らす。

私はおそるおそる、聞いた。

「……ルシアンって……もしかして……私のこと、好き、だったの……？」

すると、涙にぬれたその目が見開かれて、くしゃっと笑った。

「いまさら気づいたの？」

「え……」

にわかには信じられなくて、私は驚いた。

「くふ……鈍感女め……でも、そんなところも好き」

むに、と優しく頬をつねり返される。

「お前にこてんばんに負かされた時も、闇ギルドに入ったお前を追ってる時も——ずっとずっと、好きだった。一日だって、お前のこと、考えない日はなかった」

驚きに固まった私の身体を、ルシアンはぎゅっと抱きしめた。

「好き……大好き……愛してる……」

熱いささやきが、鼓膜を震わせる。

首輪の拘束力は、すっかり緩んでいた。今、あのバングルを腕に嵌めれば、ミアたちに連絡が取れそうだ。

「嬉しい……お前とこうなれて……」

だけど——私を抱きしめてつぶやき続けるルシアンの腕から、抜け出すことができなかった。





**敵の聖騎士様に捕らえられ、10年分の重すぎる執着愛をぶつけられて  
逃げられない**

**制作/冷凍ばいん**

**発行/2026.1.16**

**メールアドレス**

**[hona1211jp@yahoo.co.jp](mailto:hona1211jp@yahoo.co.jp)**

※本書の無断複製・無断転載・AI学習は固くお断りいたします